2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

記入日 2009 年　1 月　20 日

1．概　要

実践団体名	名古屋大学災害対策室　歴史災害教訓伝達プロジェクト ～1944 東南海・1945 三河地震		
連絡先	052-788-6038（名古屋大学災害対策室　木村玲欧）		
プランタイトル	土地の古老の三河地震被災体験談から学ぶ、 地震・災害のしくみと防災のあり方		
プランの対象者	c. 小学校（高学年）	**対象とする災害種別**	1. 地震 7. 災害全般

【プランの目的・ここがポイント！】

「地域の歴史災害」をキーワードに、地域で過去に何が起こったのかを子どもたちが学習することで「子どもたちの防災マインド」を育て、子どもたち自身が「地域の特徴を反映した具体的な防災対策」を考えることができた。今回は地震災害を対象にしたが、本プランで提案した教育プログラムはあらゆる災害を対象にすることができ、汎用性の広いものである。

【プランの概要】

「１クラスの児童を対象にした１年間にわたるプログラム」と「多人数の児童に対する２時間で学ぶことができるプログラム」の２種類を提案することで、学校の実情に即したプログラムが選択できるように配慮した。

「１クラス・１年間」のプログラムは、被災者体験談を聞き教材を解くことによって、災害・防災への興味を喚起し、その後、土地の被災者へのインタビュー、防災に関する調べ学習、学芸会への防災劇上演、防災マップづくり、防災手帳づくりへと発展させた。

「多人数・２時間」のプログラムは、１時間目に地震の概要と被災者体験談を聞いた後、２時間目に屋台形式の体験学習を行うことで防災の知恵を身につける。その後の総合的学習の時間で、被災者体験談を基に作成した教材を解くことによって知識の定着化を図った。

【期待される効果・ここがおすすめ！】

「地域」を題材として取り上げるために、子どもたちにとって被害の具体的イメージがしやすく、災害・防災を「わがこと」として捉えることができる。

地域の被災体験を語り継ぐことによって、地域の歴史・風土・災害文化を子どもたちに継承していくことができる。また、子どもたちが学んだことを学芸会などで発表することによって、子どもたちから家庭・地域へ防災の知恵を広げていくことができる。

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

２．プランの年間活動記録

	プランの立案と調整	準備活動	実践活動
2008年6月	・安城市防災課・学校教育課・教育委員会との調整	・小学校の選定 ・小学校担当者との議論による実態に即したプログラム検討	
2008年7月	・志貴小学校の防災教育プログラム立案	・安城防災ネットとの協働による志貴小学校防災教育準備	①　11日　志貴小学校 防災教育「地震に負けない！」を実施
2008年8月	・祥南小学校の防災教育プログラム立案		
2008年9月		・安城防災ネットとの協働による志貴小学校防災教育準備	②　24日　祥南小学校 防災教育「三河地震被災体験談から学ぶ、わたしたちの防災術」を実施
2008年10月	・志貴小学校の防災劇台本作成	・志貴小学校学芸会における防災劇練習	
2008年11月	・志貴小学校のフォローアップ授業プログラム立案		③　15日　志貴小学校 学芸会にて防災劇「地震に負けない」を発表
2008年12月	・桜林小学校の防災教育プログラム立案	・安城防災ネットとの協働による志貴小学校防災教育準備	④　12日　志貴小学校 フォローアップ授業「失見当を学ぼう」、児童議論会「家に１人でいるときに地震が来たらどうするか」
2009年1月		・安城防災ネットとの協働による志貴小学校防災教育準備	⑤　13日　桜林小学校 防災教育「三河地震被災体験談から学ぶ、わたしたちの防災術」を実施

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

３．実践したプランの内容と成果

【実践プログラム①】

タイトル	防災教育「地震に負けない！」
実施月日（曜日）	７月１１日（金）
実施場所	愛知県安城市立　志貴小学校
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：木村玲欧 所属・役職等：名古屋大学災害対策室　助教 担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：林能成 所属・役職等：名古屋大学災害対策室　助教 担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：鈴木敏枝・沓名美代 所属・役職等：三河地震被災者（姉妹）
所要時間または「コマ数×単位時間」	２コマ×４５分
プログラムのカテゴリ、形式	Ｂ．講習会・学習会・ワークショップ Ｄ．総合的な学習の時間 Ｈ．出前授業
活動目的	イ．防災に役立つ資料・材料づくり オ．災害を疑似体験 カ．防災に関する知識を深める
達成目標	１時間目　地震という自然現象について理解する 被災者の体験談を聞き、地震を具体的にイメージする力を養う ２時間目　被災者の体験談をもとに、地震時に自分たちが陥る状況を理解する 被災者の体験談をもとに、地震時に自分たちがすべき行動を理解する

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	■１時間目 ０～　５分　自己紹介・事前評価シートの記入 ５～２０分　「地震」ってどうして起きるのかな？ （名古屋大学林（地震学）による、地震現象と被害の基礎知識の解説、動画等を使用） ２０～４５分　「１９４５年の三河地震」ではいったい何が起きたの？（震災当時、小学生だった沓名美代さん(当時 11 歳)と中学生だった鈴木敏枝さん(当時 15 歳)の姉妹と名大木村の対談形式の語り聞かせ） （休憩５分） ■２時間目 ０～２０分　いま地震が起きたら、私たちはどうなってしまう？ （ドリルをもとにした学習、講師陣が回りながら適宜アドバイスする） ２０～３５分　地震のときは、どうすればいいのかな？ （ドリルに書き込んだ内容の発表、地震発生後の具体的な行動の理解（名大・木村）） （最優先事項である「自分の身を守る」ことに焦点をあてて学習する） ３５～４５分　まとめ、２学期の学び学習など今後のスケジュールの紹介、事後評価シートの記入 （なぜ人は地震で死んでしまうか？：過去の地震を事例とした死因の調査）
準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	人材 ・専門家（地震および防災の専門家） ・被災者（三河地震被災者（姉妹）） ・地元防災リーダー（安城防災ネットメンバー５人） 道具 ・地震被害を知るための画像・映像資料（専門家） ・被災者体験談の絵画（専門家が被災者に事前インタビューの上、日本画家によって作成） ・事前および事後評価シート（効果測定をするための評価シート） ・被災者体験談をもとにしたドリル ・被災者体験談を文章に起こし挿絵を加えた冊子（お土産として児童に配布）
参加人数	児童２７人（６年生１クラス）

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

経費の総額･内訳概要	総額６万円 ・印刷製本代３万円（被災体験談冊子、被災体験談ドリル、アンケート用紙） ・謝金２万円（被災者１万円×２人） ・文房具等消耗品費１万円
成果と課題	【成果】 達成目標である「地震という自然現象について理解する」「被災者の体験談を聞き、地震を具体的にイメージする力を養う」および「被災者の体験談をもとに、地震時に自分たちが陥る状況を理解する」「被災者の体験談をもとに、地震時に自分たちがすべき行動を理解する」という目標を達成することができた（評価シートで検証） 今後１年間にわたる防災学習の導入として子どもたちの心に防災マインドを芽生えさせるきっかけになった（その後の１年間の防災学習の過程から判断） 【課題】 １年間の防災学習の導入として、このような体験談語りきかせでよいのか、２回にわけて地震の原理などをもう少し詳しく学習させた方がよいのか、など１年間のプログラムにおける位置づけを検討する必要がある。
成果物	１．今後１年間にわたる防災学習の導入として子どもたちの心に防災マインドを芽生えさせるきっかけになった ２.「地域における歴史災害の理解と被害イメージの醸成を図ったあとに、地震時に自分たちがすべき行動を理解する」という学習プログラムの効果について明らかにすることができた

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム②】

タイトル	防災教育「三河地震被災体験談から学ぶ、わたしたちの防災術」
実施月日（曜日）	９月２４日（水）
実施場所	愛知県安城市立　祥南小学校
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：木村玲欧 所属・役職等：名古屋大学災害対策室　助教 担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：林能成 所属・役職等：名古屋大学災害対策室　助教 担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：鈴木敏枝・沓名美代 所属・役職等：三河地震被災者（姉妹） 担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：安城防災ネット会員（１０名） 所属・役職等：安城防災ネット
所要時間または「コマ数×単位時間」	２コマ×４５分
プログラムのカテゴリ、形式	Ａ．イベント・行事 Ｄ．総合的な学習の時間 Ｇ．その他学校内での時間 Ｈ．出前授業
活動目的	ア．遊び・楽しみながらの防災 イ．防災に役立つ資料・材料づくり オ．災害を疑似体験 カ．防災に関する知識を深める
達成目標	１時間目　地震が私たちの生活にもたらす被害を理解する 被災者の体験談を聞き、地震を具体的にイメージする力を養う ２時間目　地震に対して私たちに何ができるのかを学ぶ （安城防災ネットの協力を得て３つ程度の実践的内容を「屋

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

	台形式」で学ぶ）
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	■１時間目 ０～　５分　自己紹介・イントロダクション（全員） ５～１５分　「地震に負けない！」チェックリストに答えよう １５～２０分　「地震」ってどうして起きるのかな？ （名古屋大学木村による、地震がもたらす被害の紹介） ２０～４５分　「１９４５年の三河地震」ではいったい何が起きたの？（震災当時、小学生だった沓名美代さん(当時 11 歳)と中学生だった鈴木敏枝さん(当時 15 歳)の姉妹と名大木村の対談形式の語り聞かせ） （休憩５分） ■２時間目 地震に対して私たちに何ができるのかを学ぼう！ ・班にわかれてローテーションを組みながら３つのテーマについて１４分ずつで学ぶ ・１４分で終了のアナウンスを行い、その後の１分間で片付けと次のテーマへの移動を行う ０～１４分　第１のテーマ １４～１５分　片付け・移動等 １５～２９分　第２のテーマ ２９～３０分　片付け・移動等 ３０～４４分　第３のテーマ ４４～４５分　片付け・終了 屋台テーマ： １．家はなぜ壊れるの？（台車ぶるる） 家具はどうやって固定するの？（家具固定ミニセット） ２．絵カードで選ぶ非常持ち出し品コーナー ３．身近にある物で工夫する（スリッパ・クッション・レインコート・マイトイレ）
準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	人材 ・専門家（地震および防災の専門家） ・被災者（三河地震被災者（姉妹）） ・地元防災リーダー（安城防災ネットメンバー１０人） 道具 ・地震被害を知るための画像・映像資料（専門家） ・被災者体験談の絵画（専門家が被災者に事前インタビューの上、

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

	日本画家によって作成） ・屋台運営のための資機材（台車ぶるる、家具固定セット、防災用品一式）、および材料（新聞紙・ゴミ袋等）、文房具等 ・事前評価シート（効果測定をするための評価シート） ・被災者体験談を文章に起こし挿絵を加えた冊子（お土産として児童に配布） ・被災者体験談をもとにしたドリル（後日の総合的学習の時間で復習を行う） ・事後評価シート（効果測定をするための評価シート）
参加人数	児童約９０人（５年生３クラス）
経費の総額･内訳概要	総額１３万円 ・印刷製本代５万円（被災体験談冊子、被災体験談ドリル、アンケート用紙） ・謝金７万円（被災者１万円×２人、安城防災ネット５万円（１人５千円×１０人） ・文房具等消耗品費１万円
成果と課題	【成果】 達成目標である「地震が私たちの生活にもたらす被害を理解する」被災者の体験談を聞き、地震を具体的にイメージする力を養う」および「地震に対して私たちに何ができるのかを学ぶ」という目標を達成することができた（評価シートで検証） 【課題】 予定していた時間をオーバーしてしまい、４５分の教科学習化を目指しているためにプログラムの再考が必要である 原因１　校長先生が「挨拶をしたい」と言って１０分に渡って訓示を述べたために、地震の話を５分、被災者の話を５分程度短くせざるを得なかった 原因２　屋台に参加した児童が次の屋台へ移動する時間を確保していなかったため、最終的に 10 分の延長を要した
成果物	１.「地域における歴史災害の理解と被害イメージの醸成を図ったあとに、実際に体を動かしながら防災行動を学ぶ」という学習プログラムの効果について明らかにすることができた ２．後の総合的学習の時間において、被災者体験談を基にしたドリルを解くことにより、知識の定着化を図ることができた

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム③】

タイトル	防災劇「地震に負けない」
実施月日（曜日）	１１月１５日（土）
実施場所	愛知県安城市立　志貴小学校
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：木村玲欧 所属・役職等：名古屋大学災害対策室　助教 担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：岩月佐江子 所属・役職等：安城市立志貴小学校　教諭
所要時間または「コマ数×単位時間」	２５分 （劇の練習は、授業・放課・休日など約２ヶ月間にわたって実施）
プログラムのカテゴリ、形式	Ａ．イベント・行事 Ｆ．学級活動 Ｇ．その他学校内での時間 Ｉ．その他（学芸会）
活動目的	ア．遊び・楽しみながらの防災 ウ．災害に強い地域をつくる オ．災害を疑似体験
達成目標	自分達が学習の過程で明らかにした「地域の地震災害の現実」について、劇の形式で発表することによって、地域住民に還元をする
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	１０月　名古屋大学木村の指導のもと、６年生担任の岩月先生が防災劇の台本を完成させる １０月～１１月　劇の練習 １１月１５日　学芸会にて劇の発表 （なお当日は、劇のモチーフでもある被災者姉妹にも招待状を送り来場してもらった）
準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	人材 ・専門家（地震および防災の専門家） 道具 ・劇の台本 ・劇中の大道具および小道具

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

参加人数	児童２７人（６年生１クラス）
経費の総額･内訳概要	総額５万円 ・大道具および小道具代（５万円） （この費用については、小学校校費（学芸会代）によってまかなった）
成果と課題	【成果】 達成目標である「自分達が学習の過程で明らかにした『地域の地震災害の現実』について、劇の形式で発表することによって、地域住民に還元をする」について、劇のかたちで実現することができた。 ＮＨＫ総合「ほっとイブニング」の取材を受け、後日放映された。 朝日新聞および毎日新聞の取材を受け、試みが記事として紹介された。 町内会から「町内会の催しもので再演してほしい」との再演依頼があった。 劇を見学した連合町内会長により、劇でとりあげられた「井戸水は無事だったため水には困らなかった」というテーマに対し、町内の井戸水の一斉再点検を行うことになった。 【課題】 ６年生にとっては「学芸会における１回だけの劇」であったが、再演依頼などの反響も大きく、このような劇を学芸会以外でも公演するような仕組みづくりが必要である。
成果物	１．自分達が学習の過程で明らかにした「地域の地震災害の現実」について、劇の形式で発表することによって、地域住民に還元をすることができた ２．劇を見学した連合町内会長により、劇でとりあげられた「井戸水は無事だったため水には困らなかった」というテーマに対し、町内の井戸水の一斉再点検を行うことになった ３．ＮＨＫ総合、朝日新聞、毎日新聞などの取材を受けるユニークな試みとして紹介された

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム④】

タイトル	フォローアップ授業「失見当を学ぼう」、 児童議論会「家に１人でいるときに地震が来たらどうするか」
実施月日（曜日）	１２月１２日（金）
実施場所	愛知県安城市立　志貴小学校
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：木村玲欧 所属・役職等：名古屋大学災害対策室　助教 担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：岩月佐江子 所属・役職等：安城市立志貴小学校　教諭
所要時間または 「コマ数×単位時間」	２コマ×４５分
プログラムの カテゴリ、形式	Ｄ．総合的な学習の時間 Ｅ．教科学習 Ｈ．出前授業
活動目的	イ．防災に役立つ資料・材料づくり カ．防災に関する知識を深める
達成目標	７月１１日以降、随時総合学習の時間において、子どもたちは災害・防災についての調べ学習を行ってきた。そのなかで、特に「地震直後の私たちのようす」についてフォローアップ授業が必要であるという意見によって、下記のテーマで授業・議論会を開催することになった。 １時間目　「失見当（しつけんとう）」について理解する ２時間目　「家に１人でいるときに地震が来たらどうするか」について児童間で議論を行うことによって、地震時の適切な行動の仕方を学ぶ

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	■１時間目 ０～４５分　「失見当（しつけんとう）」について理解する （名古屋大学木村による、地震後の視野の狭窄や心理パニックの原因である失見当について、プリント学習形式で学んでいく） （休憩５分） ■２時間目 ０～４５分　「家に１人でいるときに地震が来たらどうするか」について児童間で議論を行うことによって、地震時の適切な行動の仕方を学ぶ （６年生担任岩月先生の司会によって、議論をすすめていく）
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	人材 ・専門家（地震および防災の専門家） ・地元防災リーダー（安城防災ネットメンバー３人） 道具 ・失見当についてのプリント（専門家が作成）
参加人数	児童２７人（６年生１クラス）
経費の総額･内訳概要	総額１千円 ・コピー代１千円（志貴小学校の負担でコピー）
成果と課題	【成果】 達成目標である「失見当（しつけんとう）について理解する」「家に１人でいるときに地震が来たらどうするかの理解」について、授業・児童間で議論を行い、地震時の適切な行動の仕方を学んだ。 【課題】 １年間の防災学習において、専門家によるフォローアップ授業は１回しか行わなかったが、児童から「自分たちだけではよくわからないことがわかった」と好評であった。例えば各学期１回、計３回を目処としてフォローアップするなど、もっと短いスパンで行ってもよかったかもしれない。
成果物	１．児童たちが災害・防災の調べ学習を行っていくなかで疑問に思っていた「地震直後の私たちのようす」によって、専門家のフォローアップ授業によって理解することができた ２．児童間で議論を行い、適宜専門家がアドバイスをすることによって「家に１人でいるときに地震が来たらどうするか」について具体的な方策を明らかにすることができた

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

【実践プログラム⑤】

タイトル	防災教育「三河地震被災体験談から学ぶ、わたしたちの防災術」
実施月日（曜日）	１月１３日（火）
実施場所	愛知県安城市立　桜林小学校
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：木村玲欧 所属・役職等：名古屋大学災害対策室　助教 担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：鈴木敏枝・沓名美代 所属・役職等：三河地震被災者（姉妹） 担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：安城防災ネット会員（１０名） 所属・役職等：安城防災ネット
所要時間または「コマ数×単位時間」	２コマ×４５分
プログラムのカテゴリ、形式	Ａ．イベント・行事 Ｄ．総合的な学習の時間 Ｇ．その他学校内での時間 Ｈ．出前授業
活動目的	ア．遊び・楽しみながらの防災 イ．防災に役立つ資料・材料づくり オ．災害を疑似体験 カ．防災に関する知識を深める
達成目標	１時間目　地震が私たちの生活にもたらす被害を理解する 被災者の体験談を聞き、地震を具体的にイメージする力を養う ２時間目　地震に対して私たちに何ができるのかを学ぶ （安城防災ネットの協力を得て３つ程度の実践的内容を「屋台形式」で学ぶ）

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	■１時間目 ０～　５分　自己紹介・イントロダクション（全員） ５～１５分　「地震に負けない！」チェックリストに答えよう １５～２０分　「地震」ってどうして起きるのかな？ （名古屋大学木村による、地震がもたらす被害の紹介） ２０～４５分　「１９４５年の三河地震」ではいったい何が起きたの？（震災当時、小学生だった沓名美代さん(当時 11 歳)と中学生だった鈴木敏枝さん(当時 15 歳)の姉妹と名大木村の対談形式の語り聞かせ） （休憩５分） ■２時間目 地震に対して私たちに何ができるのかを学ぼう！ ・班にわかれてローテーションを組みながら３つのテーマについて１２分ずつで学ぶ ・１３分で終了のアナウンスを行い、その後の２分間で片付けと次のテーマへの移動を行う ０～１３分　第１のテーマ １３～１５分　片付け・移動等 １５～２８分　第２のテーマ ２８～３０分　片付け・移動等 ３０～４３分　第３のテーマ ４３～４５分　片付け・終了 屋台テーマ： １．家はなぜ壊れるの？（台車ぶるる） 家具はどうやって固定するの？（家具固定ミニセット） ２．絵カードで選ぶ非常持ち出し品コーナー ３．身近にある物で工夫する（スリッパ・クッション・レインコート・マイトイレ）
準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	人材 ・専門家（地震および防災の専門家） ・被災者（三河地震被災者（姉妹）） ・地元防災リーダー（安城防災ネットメンバー１０人） 道具 ・地震被害を知るための画像・映像資料（専門家） ・被災者体験談の絵画（専門家が被災者に事前インタビューの上、日本画家によって作成） ・屋台運営のための資機材（台車ぶるる、家具固定セット、防災用

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

	品一式)、および材料（新聞紙・ゴミ袋等)、文房具等 ・事前評価シート（効果測定をするための評価シート） ・被災者体験談を文章に起こし挿絵を加えた冊子（お土産として児童に配布） ・被災者体験談をもとにしたドリル（後日の総合的学習の時間で復習を行う） ・事後評価シート（効果測定をするための評価シート）
参加人数	児童約９０人（５年生３クラス）
経費の総額･内訳概要	総額１３万円 ・印刷製本代５万円（被災体験談冊子、被災体験談ドリル、アンケート用紙） ・謝金７万円（被災者１万円×２人、安城防災ネット５万円（１人５千円×１０人） ・文房具等消耗品費１万円
成果と課題	【成果】 達成目標である「地震が私たちの生活にもたらす被害を理解する」被災者の体験談を聞き、地震を具体的にイメージする力を養う」および「地震に対して私たちに何ができるのかを学ぶ」という目標を達成することができた（評価シートで検証） 【課題】 前回9月24日における祥南小学校での２課題をクリアすることができた。 体を動かしながら学ぶ屋台形式の体験学習についてコンテンツの充実を図る必要があり、安城防災ネットのメンバーとともに今後検討していく必要がある。
成果物	１.「地域における歴史災害の理解と被害イメージの醸成を図ったあとに、実際に体を動かしながら防災行動を学ぶ」という学習プログラムの効果について明らかにすることができた ２．後の総合的学習の時間において、被災者体験談を基にしたドリルを解くことにより、知識の定着化を図ることができた

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

４．苦労した点・工夫した点

プランの立案と調整で苦労した点工夫した点	１．「１年間にわたる防災学習プログラム」についての先例がほとんどなく、１年間にわたって、どう体系的に防災を学んでいくかのプログラムづくりに試行錯誤した。 ２．「土地の歴史災害を掘り起こし、まとめ、教材にして次世代に伝えていく」という知の形式知化ともいうべき一連の過程を行うのには時間がかかり、１年間のプランでプログラムまで完成させるのに苦労した。 ３．小学校の教諭に防災の知識がないために、総合的学習の時間などにおける調べ学習において、いかに児童をインストラクションしてもらうかについて、定期的なきめ細かなフォローを行うという工夫を行った。
準備活動で苦労した点工夫した点	１．小学校を選定するまでに時間がかかった。いきなり個人的に小学校に話しをもっていっても、教科学習を中心とした小学校の賛同を得ることが難しく、まず安城市の防災課・学校教育課に主旨を話し、そこから教育委員会を通すまでに２ヶ月近くを要した。しかし、ひとたび教育委員会を通したあとは、小学校の選定まではスムーズにいった。 ２．「児童に理解してもらえる被災体験談教材」「児童の防災マインドを育てるような被災体験談教材」を作りあげるために試行錯誤した。最終的に、被災体験の絵画を教材の中心にして、絵を見てその内容を思い出しながら記述することによって、災害場面や防災の教訓へと結びつけていく教材を作成した。 ３．体験型学習については、人数が必要であり、地元の防災ボランティア団体「安城防災ネット」との協力関係を築く必要があった。最終的に安城防災ネットの協力によって「多人数の児童に対する」「２時間で学ぶことができる」プログラムを作成した。
実践に当たって苦労した点工夫した点	１.「児童の興味を引き続ける」ような１年間のプログラムを作るのに苦労をした。ただし、最初に土地の歴史災害を学ぶことによって、地震災害を「わがこと」としてとらえることができたために、その後は児童の調べ学習の状況を見ながら、「いかに子どもにとって『新鮮』『常識と違う』というコンテンツを提供できるか」「いかに体系的にコンテンツを提供していくか」という側面で苦労した。 ２.「防災」だけで１年間をもたせるのにはやはり無理があり、夏休みに「被災者の体験談を聞く」「地域の危険なところを地図上に落とす」などといった「地域」をテーマにした学習を行うことで、総合的学習を行っていった。 ３.「子どもたちが学んだことをいかに家庭や地域に還元していくか」についてのアイディアがでてこなかった。最終的に家族や地域の人々が見に来る「学芸会」において劇を上演することで、子どもたちから家庭や地域への防災の還元を実施した。

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

５．他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・同窓会組織	愛知県安城市立志貴小学校 愛知県安城市立祥南小学校 愛知県安城市立桜林小学校 愛知県安城市教育委員会	１年間にわたる防災学習の実践 体験して学ぶ防災学習の実践（２校とも） 小学校への公募・呼びかけ
保護者・ＰＴＡの組織	愛知県安城市立志貴小学校ＰＴＡ会	夏休み等の調べ学習や防災劇などへの協力
地域組織	愛知県安城市尾崎町連合町内会 愛知県安城市榎前町内会 愛知県安城市池浦町内会	歴史地震災害を地域防災に還元する試みへの協力
国・地方公共団体・公共施設	愛知県安城市役所 ・防災課 ・学校教育課	小学校への公募・呼びかけおよび次年度以降のプログラム実施に対する協力
企業・産業関連の組合等		
ボランティア団体・ＮＰＯ法人・ＮＧＯ等	安城防災ネット	体験して学ぶ防災学習の実践
職業、職能団体・学術組織、学会等	名古屋大学大学院環境学研究科	地震被害等の資料の提供

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

６．成果と課題（実践したプラン全般について）

成果として得たこと	「地域の歴史災害の理解を基礎にした防災教材・防災教育プログラム」を作成・立案し、小学校での実践を通して教材・プログラムの検証を行った。 防災教材の作成については、「土地の歴史災害を掘り起こし、まとめ、教材にして次世代に伝えていく」という知の形式知化の一連のプロセスに着目した。まず被災者体験談をもとに、災害の事実・防災の知恵について絵画にし、その絵画をもとにした「児童に理解してもらえる被災体験教材」を作成した。 防災教育プログラムについては、「被災体験談の生の声の聞き語りと、教材による体験談の復習と知識の定着化」という組み合わせによる授業を行うことで、「児童の地域理解と防災マインドを育てるようなプログラム」を提案した。また「多人数の児童に対する２時間で学ぶことのできるプログラム」と「１クラスの児童を対象とした１年間にわたるプログラム」の２種類を提案することで、学校の実情に即したプログラムが選択できるように配慮した。
全体の反省・感想・課題	「１年間にわたる防災教育プログラム」についての先例がほとんどなく、１年間にわたってどう体系的に防災を学んでいくのかのプログラムづくりに試行錯誤した。また小学校教諭には防災の知識がないために、１年間の防災教育プログラムを続けるなかで、児童だけでなく小学校教諭への継続的で細かなフォローが必要であることがわかった。 また「防災」というテーマだけで１年間をもたせることは難しく、夏休みなどに「被災者の体験談を集める」「地域の危険なところを地図上に落とす」などといった「地域」をテーマにした学習テーマを設定することで、総合的学習を続けていった。 「子どもたちが学んだことをいかに家庭や地域に還元していくか」について当初はアイディアがでてこなかった。最終的に家族や地域の人々が来る「学芸会」において防災劇を上演することで、子どもから家庭や地域への防災の知恵の還元を実施した。
今後の継続予定	「2008 年度防災教育チャレンジプラン」に採用されてから１年、安城市防災課・学校教育課・教育委員会、地元防災ボランティア団体「安城防災ネット」と協働して実践を行ってきた。 この過程で、安城市防災課・学校教育課・教育委員会がこの試みを高く評価し「来年度以降も市のプロジェクトとして継続的に行っていきたい」との内約をとることができた。今年度で検証したプログラムを基に、来年度以降はさらに学校数を増やしていきながら試みを継続させていきたい。さらにこの活動によって、地元防災ボランティア団体「安城防災ネット」にとって継続的な活動を保障するものになり、団体の活動資金ともなる効果も期待できる。

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

7．自由記述欄　①

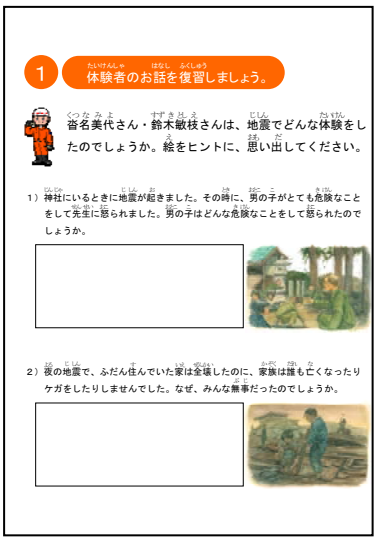
7月11日　導入（安城市立　志貴小学校（２時限連続））

地震についての解説（地震学者）

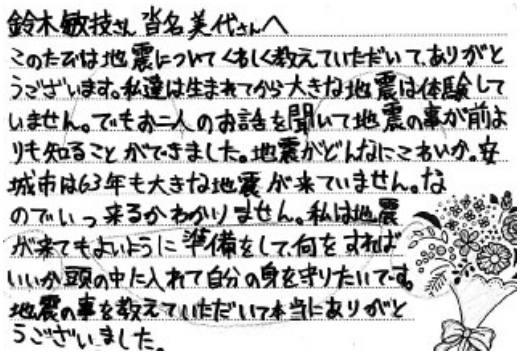
被災体験の語りつぎ（体験談の絵を背景にして語りつがれる）

ドリルによる知識定着型のふり返り学習

地震が来た！ときのいのちを守る演習



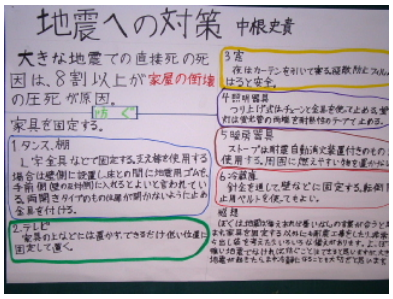
ドリル学習で使用した手作りドリル
被災者の被災体験をふり返りながら災害・防災の知恵を学べるように工夫している

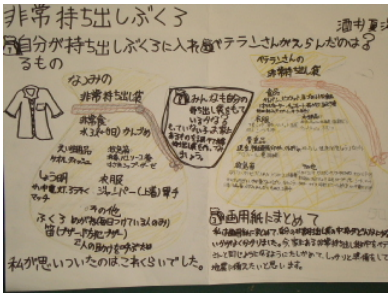


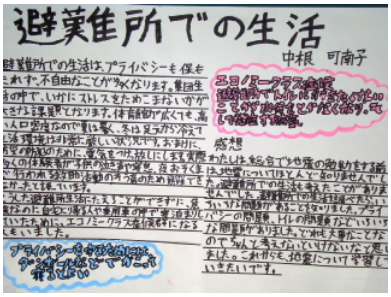
鈴木敏枝さん 皆名美代さんへ
このたびは地震についてくわしく教えていただいてありがとうございます。私達は生まれてから大きな地震は体験していません。でもお二人のお話を聞いて地震の事が前よりも知ることができました。地震がどんなにこわいか。安城市は63年も大きな地震が来ていません。なのでいつ来るかわかりません。私は地震が来てもよいように準備をして何をすればいいか頭の中に入れて自分の身を守りたいです。地震の事を教えていただいて本当にありがとうございました。

←子どもたちの感想

→↓その後のさまざまな調べ学習の一部







2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

7．自由記述欄　②

11 月 15 日　学芸会での防災劇上演（安城市立　志貴小学校）

劇は、被災した２人の姉妹の想起のかたちで進行する

劇のそれぞれの場面には、災害の事実・防災の教訓が含まれている

←招待された被災者姉妹

←最後は、三河地震の被災体験絵画を写しながら合唱する

三河地震を創作劇に

安城市立志貴小学校で6年生　被災者の体験談聞き

毎日新聞(11 月 15 日朝刊)が上演をＰＲしてくれる

真剣なまなざしで見つめる観客と被災者姉妹（右手前）

12 月 12 日　フォローアップ授業（安城市立　志貴小学校（２時限連続）

専門家による講義のあと、児童議論会によって「地震後の適切な対応の仕方」を児童自身で考える

1945年の大地震　戦時下　実態伝わらず

三河地震の教訓学んでドリル

名大　安城の3小学校で授業

児童ら被災体験聞く

↑朝日新聞（12 月 3 日）に試みがとりあげられる

人間にも心のブレーカーというのがあるのを初めて知った。先生にみんながなるというのも知った。

失見当のことを知らない人におしえてあげようと思った。訓練をもっとちゃんとやって、いざというときにあわてなくてすむようにしたいです。

児童による感想

2008年度防災教育チャレンジプラン
最　終　報　告　書

7．自由記述欄　③

9 月 24 日　安城市立　祥南小学校（２時限連続）

地震についての解説（ブラジル人なども対象にしたもの）

被災体験の語りつぎ。学年人数が多いため、体育館で行われた

司会との対話形式により、授業時間に収まる時間で効果的に語りつぐ

安城市防災リーダーによる建物被害のイメージ体験

２時限目はいくつかの屋台を児童が回る（避難時に必要な道具）

身近なものを活用することで、震災時に必要なものを作ろう体験

1 月 13 日　安城市立　桜林小学校（２時限連続）

三河地震 64 年目の日に開催。全壊率 90%以上の集落もあるため、集落被害などについても解説

被災者の体験談。時間管理をして、9 月の祥南小学校(15 分)よりも 10 分多い 25 分を確保できた

屋台の内容も一部改良。避難時に必要な道具について、ビンゴ形式で知ることができる

9月の祥南小学校では公団居住者が多かったが、今回は一戸建てが多く、児童の興味をより多くひく

手をうごかしながらモノを作る屋台は児童に大人気（ゴミ袋でレインコートを作る）

屋台全景。体育館の前半分で講義・体験談を聞いたあと、後ろ半分で屋台をまわる